フェンシング部における数年後を見越しての戦略的強化

～ 強くしたいという思いだけで突き進んできた10年間の取り組み ～

香川県立高松北高等学校

前　田　雄　亮

１．はじめに

平成24年、25歳で教員になり９年が過ぎた。生まれ育った香川県のフェンシングをさらに強くしたいという思いで故郷に帰ってきて、初任から専門であるフェンシング部の顧問を任された。自身が望んだ環境のはずなのに、理想と現実は全く違っていた。就任当時まだ若かった私は、意欲的な取り組みができていない部員を見ては、“こんな生徒を教えたくて教員になったわけじゃない”という感情が存在した。思い返すと、自分の指導力の無さから目を背けて、教育者・顧問として本当に「だめ」だったと思う。

詳細は後述するが、自身の気持ちに転機を迎える事があり、そこからは自校の競技力向上のため、そしてフェンシング強豪県としての灯を消さないために、必死になって部活動の指導を行ってきた。この10年間、いろいろ考えて取り組んできたことで、現在は自分の理想とする部活動の形に少しは近づいてきたかと思う。

本研究では、10年間の取り組みや自身の考えをまとめることで、今までの部活動指導を再確認し、それを地盤に今後さらなる高みを目指したいと考える。また、自身の課題を明確にし、それを考察することで、自校だけでなく香川県全体のフェンシングの発展につなげたい。

２．学校紹介とフェンシング部

（１）学校紹介

1983年に高松北高校として創立。2001年には香川県初の県立中学校である高松北中学校が併設され、県内で唯一の公立中高一貫教育校となった。今年で創立38年となり、すべての生徒が輝く学校を目指して、飛翔・グローバル・カルチャー・スポーツのコース制を設け、多彩な個性に対応している。充実した設備を活かし、14もの運動部があり、毎年複数の部が全国大会に出場している。最近では、有名国公立大学に進学者を出すなど、文武両道の高校として成果を収めている。

（２）フェンシング部の練習環境と実績

フェンシング部は平成元年に創部され、創部32年目を迎える。創部当時は、体育館のステージを利用して練習を行っていたが、平成２年９月に体操・レスリング・フェンシングの専用体育館ができて以降、練習環境は格段に良くなった。

顧問就任後の実績　（Ｆ：フルーレ、Ｅ：エペ、Ｓ：サーブル）

就任	年度	インターハイの主な結果	全国選抜大会の主な結果
１年目	H24年度	女子団体ベスト８	出場なし
２年目	H25年度	出場なし	出場なし
３年目	H26年度	女子団体・女子個人ＦＥ出場	出場なし
４年目	H27年度	出場なし	出場なし
５年目	H28年度	男子団体・男女個人ＦＥ出場	出場なし
６年目	H29年度	女子団体・男女個人Ｆ出場	団体Ｅ男子優勝・女子準優勝
７年目	H30年度	Ｅ男子優勝、女子４位	団体Ｆ・Ｅ女子３位
８年目	Ｒ元年度	女子団体３位	中止
９年目	Ｒ２年度	中止	団体Ｅ男子ベスト８
10年目	Ｒ３年度	男女団体ベスト16 個人女子Ｆ７位、女子Ｓ３位	

３．フェンシングの紹介と県内の状況

（１）競技の紹介

フェンシングは、フルーレ、エペ、サーブルの３種目がある。使用する剣の形状や、得点となる有効面、優先権の有無などが種目ごとに異なっている。

フルーレ：「優先権」を尊重する種目。剣や動作で「優先権」の取り合いを行い、「優先権」を保持したまま、攻撃を行う。
有効面は胴体のみ（背中を含む）。「突き」だけが得点となる。

エ　　ペ：基本ルールは単純明快。先に突いた方にポイントが入り、両者同時に突いた場合は双方のポイントとなる。
有効面は全身（足の裏も有効）。「突き」だけが得点となる。

サーブル：フルーレとエペが「突き」だけの競技であるのに対し、サーブルには「斬り（カット）」が追加。ルールはフルーレと同様「優先権」に基づいている。有効面は上半身のみ。

（２）県内の状況

県内にはフェンシング部のある高校が４校ある。県内高校生の部員数は、男子34名、女子25名の総計59名である。部員数の多さで見ると、毎年全国15番目から20番目ぐらいである。平成５年（1993年）に東四国国体のフェンシング競技が香川県で行われ、その強化のため、平成元年から多くの優秀な選手や指導者が香川県に来るようになり、競技や強化の面で活躍した。国体では、ほぼ毎年入賞しており、まさにフェンシング強豪県である。

４．競技力向上に向けた取り組み（戦略的強化）

（０）転機

顧問に就任して１年目は、インターハイ団体で女子がベスト８に入ったが、それは前任の顧問の先生の力だと考えている。自分の真価が問われる顧問２年目には、１年通して個人でも団体でも全国大会出場を逃した。これは高松北高フェンシング部として17年ぶりのことであり、部としての汚点となった。今思うと、“顧問としてどう振る舞えばいいのかも分かっていない人間”が顧問をしていたのだから、それは至極当然の結果であった。転機は、どん底だった２年目に訪れた。当時の香川県フェンシング協会の理事長から、「（結果出てないけど…）何をやっているの？」と短い言葉で叱責された。ちょうど自分自身が悩んでいた時期だったので、“必ず勝ってやる”という強い気持ちが芽生えたのを今でもはっきり覚えている。そこからは、タイトルにもあるように、ひたすら“強くしたい・勝ちたい”という思いだけで突き進んできた。

（１）中高一貫指導（戦略１）

フェンシングは、近年では小学生や中学生から競技を始める者が多く、高校から競技を始めたのでは遅れがある。私は、顧問２年目から中高一貫校であるという利点を活かすために、それまでは中学生と高校生が違う場所で行っていた練習を、同じ場所（体育館１階）で一緒に練習するという取り組みを始めた。常に２番手だった県内での立場を逆転するために、数年後を見越して中学生の指導に力を入れた。必然的に高校生の練習を見る時間は少なくなり、当時の高校生の競技力を伸ばしきることができなかった。就任４年目に全国大会出

場を逃しているのには、そういう原因があると考える。当時の高校生には申し訳ないが、その当時は「今は我慢して数年後に備えよう」と考えていた。当時の指導力の無さを悔やむばかりである。

６年計画で育成できるようになったことで、種目特化型の選手育成や基礎基本の徹底ができるようになった。中高生の意識は徐々に変化し、高校入学時には県内でリードをした状態になる等、数えきれないほどの利点があった。現在では、中高一貫の指導形態がようやく形になり軌道に乗っているように感じる。見切り発車だった当時は、失敗ばかりで全然うまくいってないように感じていたが、就任２・３年目に当時中学生だった生徒が、高校入学後に選抜大会優勝やインターハイ優勝という結果を残した点において、取り組みに間違いはなかったと確信している。

（２）専門性を活かして（戦略２）

日本では、海外勢に比べて身長は低いが小回りが利くという特徴を活かすため、古くからフルーレを主流に行う文化があった。そのため、インターハイ・全国選抜大会においても、団体戦はフルーレしかなかった。それに対して、私の専門種目は、大学時代に培った“エペ”であった。高校・大学を通じてフルーレの指導経験がなかった私は、自身の指導力に自信がなかった。また、フルーレを高いレベルで教授できる指導者は全国的に非常に多く、指導技術を学んでも本当に全国で通用する選手を育成できるのかは疑問だった。

しかし、自身の専門のエペにおいてはそうではなかった。他県の選手や指導者を見て、エペなら勝てる選手を育てることができると考え、まずは個人戦で全国大会に出場して上位に入れる選手を育てようと思い、エペの指導に力を入れた。中高一貫指導を活かして中学生からエペを教えるようになり、２年後には全国中学生大会でベスト８に入る選手が出てくるなど結果はすぐに表れた。

そして、平成28年度から全国選抜大会（団体戦）でエペやサーブルも行われることが平成27年に決定した。本校は、エペを専門で行う環境が整っていたため、他校に比べて大きくリードしていた。平成29年度に男子が優勝、女子が準優勝という結果を出せたことで、全国的に大きく注目されるようになった。

戦うフィールドを変えてみるのは、大きな選択肢の一つだと感じている。

（３）トッププレイヤーをつくること（戦略３）

エペを指導するようになり、私は“トッププレイヤーを育成する”ことを１つの目標にした。トッププレイヤーを育成することの利点は以下であると考えた。

・高松北高校への注目度ＵＰ
・トッププレイヤーが与える周りの部員への良い影響
・顧問と生徒との信頼関係の増大

就任２・３年目にトッププレイヤーになる素質がある部員が、中学生で入部したので、その部員を中心に徹底的にエペを指導した。全国中学生大会では入賞し、平成30年度のインターハイでは、エペ男子個人で優勝、女子個人で４位という結果を収めた。またそれに伴い、周りの部員の意識や技術は、おのずと向上した。団体としての力がついてきたことで、平成29年度には全国選抜大会の団体戦で男子優勝、女子準優勝を達成し、翌年には同大会で女子３位という成績を収めることができた。“エペの高松北”と注目されるようになり、部員達にはプライドが生まれた。県内で２番手だったチームはいつしか、全国でいかに勝てるかと

いうチームに変貌していった。また、これを機に練習試合も多く申し込まれるようになり、強豪チームが練習に来てくれるという機会が増えた。それは、エペに限らずフルーレにも良い影響を及ぼし、平成28年度以降はフルーレにおいても毎年全国大会に出場できるようになったのは、私の中の嬉しい副産物である。トッププレイヤーを育成するということは、私が思い描いていた何倍もの影響をチームにもたらすこととなった。

（4）目先の勝利にとらわれない（戦略4）

“今じゃなく、将来勝たせたい”これは、私の指導理念の1つである。基礎基本を重視する私は、必然的に時間が必要になってくる。その点で、中高一貫校で6年間指導できるということは私の指導方針に合っている。

今現在の結果に多くの部員や保護者がこだわる。これは当然の事であろう。私はそういった指導をしていないので、時には批判を浴び、評価をしてもらえないこともあった。将来勝つために、目先の勝利を捨ててでも今教えなければならないこと・やらなければならないことは非常に多いと思っている。

しかし、前述のような考え方で基礎を重視しすぎるあまり、指導に時間がかかるので、高校生から競技を始めた者をうまく伸ばしきれないという問題点もある。最近では、基礎の徹底に重きを置きつつ、同時進行で応用や勝ち方をいかに教え込むかも必要だと考え取り組んでいる。“目先の勝利にとらわれない”という信念は持ちつつも、目先の勝利をも勝ち取るための指導技術も今後考えていきたい。

5．部活動の顧問・指導者・教育者として

（1）部活動とは何か？

私はこれまでの経験を通して、部活動を次の様に捉えている。

「部活動とは、学校教育の一環であり、生徒の学校生活がきちんとした上での＋αの活動である。」

これを念頭に、部員の生徒指導・生活指導にも力を入れた。また、数年前に「人間力の向上なくして、競技力の向上なし」という言葉に出会った。これは、JOCのスローガンである。“部活動においては、人間性を育てることが大事である”と何となく感じて指導してきたが、この言葉に出会った時、これは確信に変わった。個々の人間的成長を促すことで、部活動にも良い影響をもたらし、良い部活・チームを形成できるようになってきたと感じている。

（2）自身の指導スタイルを持つ

①　本気を伝える・喜怒哀楽を見せる

転機を迎えてから一番変わったことは、“自身が勝ちたいことや、試合で勝つということ”などの「私自身の本気」を部員に伝え始めたことだった。自身の熱意を部員に見せることで、部員の心に訴える指導を心掛けている。また、最近では喜怒哀楽を表現するよう意識している。魅力ある指導者になるために、部員と一緒に感情を共有することも大事であり、人間味ある顧問になることが重要だと考える。

②　自分の感覚を信じ、嘘はつかない

現在、私は「自分の感覚を信じ、生徒に嘘はつかない。」という信念を持ち、指導している。“全国トップレベルと比較した時の個人やチームの位置・相手に対しての勝敗・今後の予想”をありのままに伝える。部員の現在地をはっきり示し、そこから努力と奮起をできる

ような指導を心掛けている。ただ、努力の方向性や歩むべき道を正しく示すことには配慮している。部員にしっかりと現状を把握させた上で方向性や進むべき道を示すと、部活動はより良い方向に展開していくと考える。

（3）教育者・指導者としての成長を怠らない

部活動の顧問は、教育者・指導者としての資質の向上が求められると考える。

教育者としては、教育現場を通して成長し、そこでの経験を部活動に生かすことを大切にしている。私の場合、“授業での板書＝生徒の視覚から得る情報量の多さ”と考え、フェンシングにおける考え方等を説明する時にはホワイトボードを活用して、視覚に訴えることを大切にしている。また、体育などの授業を通して、“アドバイスのレベルとタイミング”ということも考えるようになった。高度なアドバイスをいかにレベルを下げ分かりやすく伝えるのか、今の部員に必要なアドバイスとは何かを常に考え、それらを簡潔に説明する技術を日頃から磨くようにしている。

指導者としては、常に学び・常に成長することを止めないことを念頭に置いている。生徒が目標を立てた時、指導者には生徒の目標を叶えるだけの技量や指導力が必要だ。今、自分に生徒が目標とするところへ導くための技術や指導力は本当にあるのかということを常に考え、生徒が練習するのと同様に、自身も指導に対して研究を怠ってはいけないと考えている。遠征や試合を通して他の指導者の指導法を学び、日本代表選手の動画研究や代表コーチとのやり取りを通じ最先端の指導技術を吸収することは、自身が指導者として成長するために必要不可欠なことだと考える。

6．現在の取り組み

現在、部員数は中学生13人・高校生27人の総勢40名であり、私が顧問になって以降、過去最多である。部員数の増加は非常に嬉しいことであるが、それに伴い練習スペースの確保や１人１人の実働練習時間の確保が難しいという問題が出てきた。こういった問題の改善や、これまでの中高一貫指導をさらに強固なものにするため、昨年度からは、下に示すように種目間や中高間で別メニューを行う日を設定し、時間や場所を有効的に活用するようにした。また、それまでは無作為に行っていたトレーニングも、日や時間を設定し、細部にわたりメニューも指示することで、意図的に行わせることにしている。

取り組み始めて、まだ日は浅いが、練習にめりはりができ、各練習に対して生徒の意識性が向上しているように感じる。また、今年の夏からは中高別に練習を行う日を設定したことで、高校生に頼ってばかりだった中学生が一つの集団として自立し始めるようになったのは大きな成果であると思っている。高校生を教えることに多くの時間を割いていた私も、中学生をゆっくり丁寧に指導できる時間ができたことも大きいと思う。今後はそれを常態化していくところまで考えたい。

	中学		高校	
月	OFF		OFF	
火	中高合同	中：16:10～17:00 アジリティトレーニング　17:00～18:00 合同ファイティング 高：16:00～17:00 フォームアップ・レッスン 17:00～18:00 合同ファイティング 18:00～19:00アジリティトレーニング		
水	16:40～18:00	F：レッスン・課題ファイティング E：フィジカルトレーニング	16:40～18:00	F：レッスン・課題ファイティング E：フィジカルトレーニング
木	合同フリーファイティング【レッスン(ファイティング中)】→ 中学終了後、高校課題ファイティング			
金	16:40～18:00	F：フィジカルトレーニング E：レッスン・課題ファイティング	16:40～18:00	F：フィジカルトレーニング E：レッスン・課題ファイティング
土	中高合同練【レッスン(ファイティング中)・フリーファイティング】			
日	OFF		通常（E:トレーニング・集団レッスン・戦術理解など）	

７．今後の課題

（１）地方でトップ選手を育成する難しさ

クラブで練習する選手の存在やエリートアカデミーの選手、ＮＴＣを拠点に練習を行う選手の存在は、他競技と同様にフェンシングにおいても軽視できない。様々な面で練習環境が劣る地方でいかにトップ選手を育てるかは、非常に難しい問題である。練習環境をカバーするだけの知識や技能を生徒には与えたい。そのためには私自身が成長し、代表級の知識や技能を指導できるようにならなければならない。

（２）令和４年度のインターハイに向けての強化

令和４年度に四国で開催されるインターハイでは、フェンシング競技は香川県開催である。目標としては、最低でも個人・団体ともに入賞という結果を出したい。インターハイでは、団体戦がフルーレしかないため、今後はエペだけでなくフルーレの強化にも取り組んでいかなければならない。今までの経験を活かし、１年後を見越して現在の中学校３年生から高校２年生を戦略的に強化していこうと考えている。国内の大会がいろいろ中止になったり、遠征や練習試合も満足にできない状況下でいかに結果出すのか。１年後を考えてのチーム編成や生徒への意識づけ、自身の指導レベルの向上などやるべきことは多岐にわたると考えている。

（３）部員全員が部活動に対して満足感を得るには

部活動への満足感は、競技成績に比例するところがあると考える。私は、競技成績がなかなか出ない者や高校生から競技を始めた者も幸せにしたい。現在はそういった生徒への声掛けを以前より多くし、コミュニケーションを増やそうとしている。その中で、少しでも多くの部員に全国の舞台で活躍してもらうために、種目変更を促したりすることも一つの手段として考えている。

また、部員全員の目標を知ることは大切だと考える。競技成績の面だけでなく、進路など多方面にわたる目標を共有し、それを実現できるよう道を準備するということは、顧問としての大切なことだと思う。

そして、生徒には、部活動を通してスポーツマンシップや社会的マナーなどを学び、フェンシング部でしか得られない全国大会での経験や遠征先での活動などを通して、多様な価値観を身に付け自身の世界観を広げていって欲しいと考える。生徒が部活に対して満足感を得るには、競技成績や進路面で目標を叶えることに加え、将来的に社会に通じる人間形成ができたと実感する必要があると考えている。

（４）県全体の強化

今後は、自校の強化だけにとどまらず、県全体の強化も考えていきたい。今考えていることは２つある。

１つ目は、フェンシング競技が盛んな県を模倣し、ジュニア期からの強化のシステムを構築していくことである。香川県にもジュニア期からフェンシングを練習する環境はあるものの、現段階では中学生でフェンシングをする環境が本校にしかなく、ジュニア期からの一貫指導システムがいまだ構築されていない現状がある。ジュニア期からの指導システムを構築するためにも今後県内における指導者の数を増やしていく必要性がある。また、香川県が

行っている“スーパー讃岐っ子育成事業”とうまく連携する必要性も感じている。

２つ目は、「愛」を育む教育活動を実践していきたい。生まれ育った香川県への愛、育った母校への愛、フェンシングへの愛。競技を好きになり、様々な事に感謝し、将来少しでもフェンシングに携わることで母校や香川県へ還元してくれる人間を育てたい。これには、そういった意識づけを行うことが必要だと感じる。また、指導者を増やしていくことも教育の持つ力は大きいと考える。現在もジュニア期の児童生徒を指導する機会を意図的に設け、高校生期から指導をするということに慣れ親しませたりもしているが、これまで以上にこのような機会を設けていきたい。日々の教育の中から将来的にフェンシングに携わる人間を増やしていきたい。

８．まとめ

中高一貫指導やその他の取り組みは、決して初めからうまくいっていたわけではない。最初から戦略的だったわけではなく、その中にはたくさんの失敗があり、止めた取り組みもある。ただ、常に強くしたいという思いだけは持ち合わせてきた。そして、その中で常に考え・学び・変化を求めてやってきたことが少しずつ形になっていき戦略的になっていったのではないかと考える。

また、周りの先生方からは技術的な指導だけでなく、部活動では人間力を高めるような指導が大切であると考えさせられた。人間力を高める指導は、個に対するものが多いが、その個への影響はいずれチームに波及する。現在では、個だけではなく、チームマネジメントの側面も重要視している。本校職員やフェンシング関係者で、良い見本となる先生方が周りにたくさんいた環境に感謝したい。

これまでの経験を通して、結果を求めるには年数がかかることが分かった。これからの取り組みも常に数年後を見越して行っていきたいと考えている。また、これまでの経験や知識・技量を活かして、今後は物事を成し得るスパンを短くしていきたいとも考えている。今まで取り組んできたように、常に“思い”を大切にし、数年後を考えて今やれることは何かを考えて、これからも歩み続けていきたい。

最後に、この夏に開催された東京オリンピックにおいて、本県高松北高校出身の宇山賢選手がフェンシングの男子エペ団体戦で見事金メダルを獲得した。本県・本校出身の選手がオリンピックの舞台で頂点にたったことに深く感銘した。生徒に与えた影響は非常に大きく、その試合を観戦した次の日からの練習は皆、目の色が違っていた。宇山選手のように非常に多くの人物に影響を与えられるような選手を今後育成していくことが、香川県のフェンシングの指導者としての、これからの使命だと思う。

本研究を通して、自身の取り組みや課題を再確認することができ、今後に繋げられそうな良い経験となった。こういう場を与えて頂いた関係者の皆様に感謝したい。